

2 植物生長調節剤による垣根整枝ブドウ「ピオーネ」の新梢伸長抑制

ねらいと成果

ブドウの垣根整枝栽培は慣行の平棚栽培に比べて、主な栽培管理の作業強度が大幅に軽減される。しかし、本整枝法は結果枝を斜め上方に誘引するため、樹勢が強くなり副梢の整理を含めた新梢管理が増加する。今回、その軽減対策として植物生長調節剤処理を行い、新梢伸長抑制効果と果実品質に及ぼす影響について検討した。

オーキシン拮抗剤であるマレイン酸ヒドラジド液剤（以下、MH液剤という。）処理は、新梢の伸長および副梢の伸長、発生を抑制し、遅伸び防止に効果があり、垣根整枝における新梢管理の軽減に有効であった。

内容

8年生ピオーネに対してMH液剤（商品名エルノ一液剤200倍液、150ℓ/10a）を着色期（8月4日）に散布処理した。供試樹は垣根整枝の株間5mまたは10m×列間2.5m（80本または40本/10a）で、防根シートによる根域制限栽培樹（畝の高さ地上部20cm、地下部30cm、畝幅90cm）を用いた。収量及び果実調査は9月10～24日に、枝の生育調査は処理前と落葉後に行った。

垣根整枝の株間5m樹では、MH液剤処理により明らかに新梢の伸長および副梢の伸長・発生を抑制した。新梢の伸長がほぼ停止していた株間10m樹においては、副梢の伸長、発生をやや抑制した（表1）。MH液剤処理は垣根整枝における新梢管理の摘心や副梢整理の軽減にきわめて有効であった。

MH液剤処理が果実品質に及ぼす影響は、果粒重が株間5m、10m樹ともにわずかに大きい傾向であったが、その差は小さかった。また、果皮色は、株間10m樹においてわずかに向上したが、株間5m樹では無処理区と同等であった。糖度、酸含量には処理による差がほとんどなく、収量への影響も認められなかった（表2）。

葉害の発生は認められなかった。

今後の方針

垣根整枝栽培においてMH液剤処理は新梢や副梢の発生・伸長抑制に顕著な効果があり、特に株間5m樹で有効である。今後、他の植物調節剤の利用も含め、次年度への影響を検討し、垣根整枝における効果的な新梢管理の軽減技術を確立する。

福井謙一郎（中央農技・園芸部）

表1 ピオーネの垣根整枝栽培におけるMH液剤処理が結果枝の生育に及ぼす影響

株間	試験区	処理前(8/4)		処理後(11/22)				
		枝長 (cm)	葉数	枝長 (cm)	枝径 (mm)	登熟率 (%)	総副梢長 (cm)	副梢 発生数
5m	MH区	153	14	157	12.2	95	71	6.6
	無処理区	168	15	215	11.8	89	144	8.7
10m	MH区	148	14	149	11.8	97	36	5.1
	無処理区	147	16	152	11.9	97	54	7.1

表2 ピオーネの垣根整枝栽培におけるMH液剤処理が収量、品質に及ぼす影響

株間	試験区	収量(kg)		果房重 (g)	果粒重 (g)	果皮色 ¹⁾	糖度 (Brix)	酸含量 (g/100ml)
		(/樹)	(/10a)					
5m	MH区	25.0	2002	611	14.0	7.0	17.6	0.45
	無処理区	26.0	2077	634	13.6	7.0	17.5	0.43
10m	MH区	51.6	2065	628	15.4	7.6	17.4	0.42
	無処理区	51.8	2072	616	14.9	7.0	17.7	0.45

1) カラーチャート数値